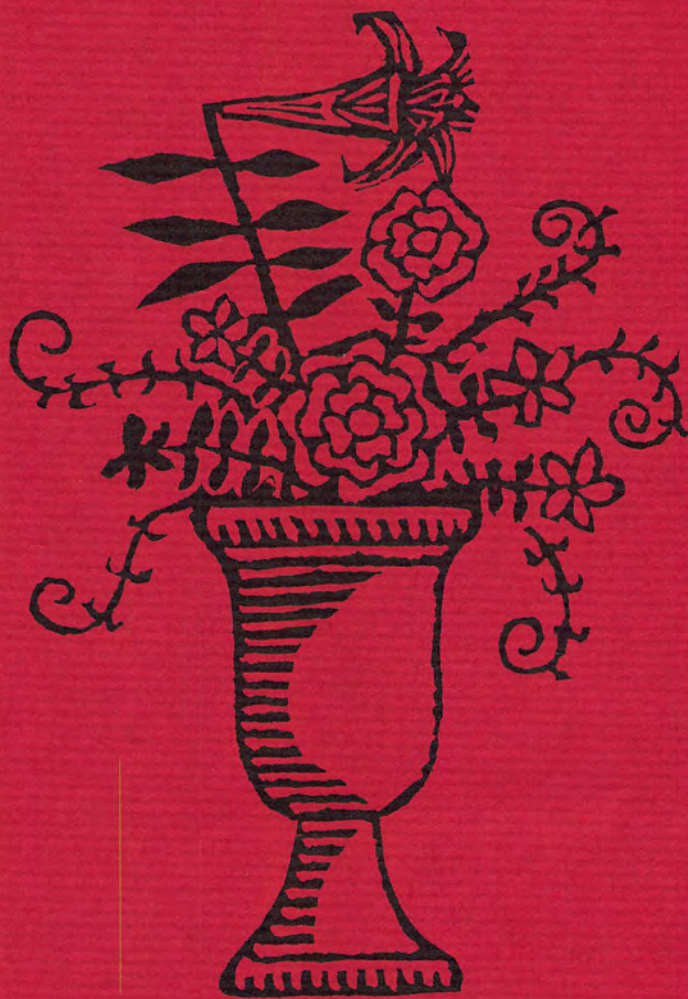


香葉



1989

NO.18

目 次

講演会のご案内	1
学長就任にあたって	下 田 哲 2
林淳三先生感謝の集い	4
22年間の専任勤務を終えて	林 淳 三 5
女専のページ	7
覚え書	上 市 二 郎 10
合同同窓会報告	12
どんな時にお赤飯をつくりませんか?	大 越 公 平 13
お元気ですか?	15
三春台ハンドベルクワイヤ演奏会	20
旅行記	吉 屋 保 子 21
名簿のお知らせ	23
母校ニュース	24
クラス会報告	25
決算・予算報告	27
賛助金寄付者名	28

表 紙……………関 頼 武

カット……………小 西 晶 子



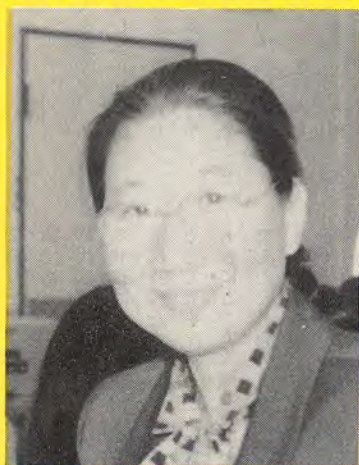
小さな命のさけびをあなたに

— 貧困と飢餓の国からのメッセージ —

『宮崎安子先生 講演会』

「心配そうな母親に抱かれた赤ちゃんは、お誕生日を過ぎたばかり。……咳もします。息ができないのでチアノーゼで唇がどす黒くみえ、つめが赤紫になっていました。『いつからこんなに?』『もうひとつきになるだ』『どうして早く来なかったの、すこし悪くなりすぎだネ』涙をいっぱいためて、おろおろしていた気の弱そうなお母さんは、ワッと泣きふしてしまいました。」……先生著の本からの抜粋です。

平和で豊かな日本。でも世界にはまだまだ貧困と飢餓がはびこっています。小さな子供達はなすすべもなく死んでいくしかない。そんなバングラデシュへ日本キリスト教海外医療協力会の派遣医として、通算12年間医療協力をしていらした宮崎先生のお話を、スライドと共に是非お聴き下さい。



テーマ：バングラデシュに生きて

日 時：1989年11月5日(日)

午後1:00～

場 所：図書館 視聴覚教室

(図書館棟 5階)

▽講師の紹介▽

1933年 東京に生まれる

1960年 東京女子医大卒業

同年 日本自由キリスト教会にて洗礼

1961年 アメリカニューヨークにてイン
ターン小児科のレジデント

1968～'72 日本キリスト教海外医療協力会
の派遣医としてアフリカナイジェ
リアに夫君宮崎亮氏、家族とと
もに医療協力

1980～'88 再び派遣医としてバングラデ
シュ・ボグラにて医療協力

1989年 4月より長野県小布施の新生病
院勤務、現在に至る。



★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として3号館101号室にて、コーヒーと手作りのお菓子のサービスをいたします。お友達同志お誘い合わせの上是非お立ち寄り下さい。〈11月5日(日)のみの開室です。〉

学長就任にあたって

下田 哲



この度、林淳三先生の後を受けて、私は再び本学の学長に就任致しました。前回は一九七四年（昭49）九月より一九七八年（昭53）八月までの四年間ででしたが、丁度満十年振りということになりました。学内・学外の情勢もこの十年間に随分変わり、とまどうことも多々ありましたが、はや八ヶ月を経過し（五月現在）、ようやく様々な動きを把握し直しつつあるという処でしょうか。

卒業生の皆さんも、夫々に与えられている職場や家庭において、お元気に御活躍のことと思います。

私が本学の専任教員になったのは、一九六三年（昭38）です。今年の三月で満二十六年となり、二十七年目ということになります。一般教養の所属で、キリスト教概論・倫理学の二科目を擔当して来ました。キリスト教概論は必修であり、しかも殆ど私一人で擔当して来ましたので（学長在職時を除いて）、学生の皆さんには広く接したのですが、半年という短期間ということもあって、広く、しかし浅く接したというところでしよう。皆さんは私の顔は知っていても、それ以外は余り御存知ないだろうと思います。私は自分自身のことについて余り語ったことはないし、又、好まないのですが、今回は、少し自身のことを述べて置きます。

私は一九二七年（昭2）の生まれです。愛媛県に生まれたのです

が、直ぐに長野県松本市に移りましたので、故郷は信州と人には言っておりません。松本で小学校・中学校（旧制）を終りました。父は牧師であり、関東学院の前身である東京学院神学校の卒業生でした。

時代は昭和の軍国主義の時代に入ってゆき、殊に長野県というキリスト教にとつては石地である地方の、牧師の子供という戦前では非常に特殊な立場の少年として、その時代を過しました。日中戦争、そして太平洋戦争と時代はいよいよ暗黒時代へ転じてゆき、キリスト教にとつて苦難の時期となり、子供心にもそれは実に重苦しい日々でした。教会の日曜礼拝に珍しく壮年の男が来ていると思うと、それは私服の憲兵か特高の刑事ということであつたのです。超国家主義一色にぬられた中学校の教育には特に苦痛を感じ、楽しかった思い出は殆どありません。牧師の息子ということで、随分いじめにも会いました。時代が時代でしたから仕方がないといえはその通りですが、精神的葛藤が常に重く続いています。

一九四五年（昭20）八月九日、岩手県釜石市において、釜石市へのアメリカ海軍の二度目の大艦砲撃によって、父は教会堂と運命を共にしました。（当時、父は転任によって釜石市の教会の牧師でした）。そして日本の敗戦を迎えました。僅か六日の後です。

この出来事により、私のキリスト教に対する考えはガラリと変わりました。何のためにキリスト教など信じなければならぬのか。キリストを信じ、歩んできた結果がこういふことならば、もう私はキリスト教など御免こうむりたい、と心の底から思い、そのように数年間生きてきました。

しかし、結局、私はキリスト者になりました。旧約聖書のあの「ヤコブ物語」を私は好きです。暗く冷たい大地に唯一人で石を枕

にして寝たヤコブ——この孤独と寂寥に満ちたヤコブと天とをつなぐ梯子がかけられた。荒涼たる人生の丘陵地において、私もヤコブの如く再び神を見出した。否、神に見出された。幼ない時に印象深く聞いたこのヤコブの旅の物語は、そのまま、私の半生でもあるように思われるのです。

一九五六年(昭31)に私は関東学院教会牧師になりました。大学のキャンパス内にある教会ですから、学院の諸学校と色々な形での関係があります。当初私は学校の教員になるつもりは全く無かったのですが、学校の仕事にあれこれとかかわっているうちに、何時しか学校と兼任で働くようになり、やがて専任の教員になってしまいました。私は自分自身、牧師として不適当人間だったのではないかと良く思うことがあります。それは人に対して「キリスト教を信じなさい」と声高にどうしても言えないし、言う気にならないのです。信仰即恵み、信仰即幸福とは到底思いません。人それぞれの人生の深淵がある。その中から自分で求めてゆくものだろうと考えます。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マルコ八・三四)。
この聖句が私の心から離れません。このイエスの言葉のもつ重い意味を謎として問い、答えを見出し、又、問い返しつつ、私は半生を歩んで来ました。これからもそうだと思います。一人一人に対する最も個人的な、そして最も真剣な重い出来事として、この聖書の句を更に考えぬき、自己の実存において受けとめて行かねばならないと考えます。

「イエス・キリストに従う」——これはトマス・アケンピスの

『キリストに倣いて』のような、人間一般に与えられた戒めに文字通り従うキリスト教的生活形成のプログラムではありません。プロテスタントの「随従」は、全く個人的な、私一人に与えられる特定な「召し」であります。ですから、これはともすれば独りよがりな、己れのみ正しいとする恐れが多分にあります。そこでどうしても、これには、自己の全実存を賭けるという真摯さと、自己の人間としての限界と誤りやすさに対する謙虚さと、他者に対して最終的には神がその正否を決定されるのだという寛容とが必要不可欠であります。この途を私は自分自身のために歩んで行きたいと思っております。

前回、学長職にあった時、私は未だ四十才代の若さでした。学問・研究もしたかったし、自分や周囲をかえりみる余裕も余りなかったように思います。今回は二度目であり、年令も六十才を既に超え、残された年数はそう長くはありません。本学での今までのささやかな自己の働きの総決算として、学校のために、そして自分自身の「キリストに従う」途の最後の実践の場所として、まことに足りない者ですが全力を尽くしたいと願っております。

卒業生の皆さんの祈りと御支援をお願い致します。

◇

終わりに一つ付け加えます。私は変なモノが好きで、それは「汽車」です。今でこそ少年鉄道ファンは数多く珍しくありませんが、昔は変人扱いをされました。子供の時から(赤ん坊の時から?)のマニアでした。そのために時間や労力を随分費やしました。大いなる無駄です。しかし考えてみると、そのおかげで、暗い時代の孤独な少年時代、父を失って戦後のあの混乱と困難の時代を、何とか生

きる気力を与えられて生きていくことができたのも、汽車（機関車）が好きで、その世界に没頭できたからと云えるかも知れません。「機関車（特にS・L）と私」も、私のもう一つの人生として私に重なります。やがてヒマと時間が与えられたら、再びその世界にひたりこめるだろうと楽しみにしています。（一九八九年五月）

経 歴

- 一九四〇年 長野県立松本女子師範付属小学校卒業
- 一九四五年 長野県立松本中学校卒業
- 一九五六年 関東学院大学基督教研究所（後神学部）卒業
- 一九六五年 立教大学大学院文学研究科組織神学専攻修士課程修了
- 一九六九年 立教大学大学院文学研究科組織神学専攻博士課程終了
- 一九六九年～一九七〇年 米国留学。クレアモント大学院、パークレーG・T・Uに学ぶ。
- 一九五六年～一九六七年 関東学院教会牧師
- 一九六三年 本学専任
- 一九七二年 教授
- 一九七四年～一九七八年 女子短期大学々々長
- （七七年～八一年 野庭幼稚園々々長 兼任）

林淳三先生「感謝の集い」報告

古 城 房 子



去る三月末、林先生は定年を迎えられ、短大主催の感謝会が開かれました。先生と親交のあった内外の方三五〇余名が集まり、同窓生も一部の者が参加させて戴きました。先生は二十二年の在任中、十六年を学長として活躍され、現在の短大の発展に多大の功績のあった方でいらっしゃることは、周知の事実でありまして「香葉十七号」でもふれさせて戴きましたが、香葉会にとりましても、かけがいのない方でした。現在、専用の事務局をもち、年間の事業も支障なく、すめることが出来るようになりましたのも、先生の同窓会へのご理解とご援助のお陰です。何回も挫折しそうになる私達をばげまして会を育てることを熱心に応援して下さいました先生には只々、感謝あるのみです。この気持ちをお伝えしたいと、七月二日、ホテルリッチ横浜スカイラウンジで同窓会主催の感謝の集いを開かせて戴きました。何しろ交流の広い先生でいらっしゃるのです。今回は、ご案内を出す範囲を会の独断で決めさせていただき、県内、都内在任の四十二年度以後の、家政科、幼児教育科の卒業生にしぼらせて戴きました。又短大の前身である女専を大変尊重し、女専の方々との交流を大事にしておられた先生のお気持ちをを入れて女専の卒業生にも

（続く9ページへ）

二十二年間の専任勤務を終えて

林 淳 三

一九八九年（平成元年）三月末日で私は関東学院女子短期大学専任教授の定年（六五歳）を迎えた。思えば私が女子短大の教授として赴任したのは一九六七年（昭和四二年）四月であるから、勤続二十二年になる。私は第二次大戦が終了した翌々年（昭和二十二年）、東京の農業教育専門学校という、旧制の四年制国立専門学校を卒業した。現在の筑波大学である。同期生の八割は農業高校の先生に、二割は師範学校・青年師範学校教官などになったが、私も奈良の青年師範学校（現奈良教育大）に勤め、高等教育機関の教員としてスタートした。以来、現在まで四二年間たつのであるが、そのうち、二十二年という、ほぼ半分を関東学院で送ったことになる。

前半の二十年間は、大学、短大など学校を五カ所変り、さらに、会社の研究所一つを経験して、関東学院にきたのである。その間、恩師佐橋佳一先生（元東大教授・東京農大名誉教授）の教えをこい、おおよそビタミン研究と理科系教育に終始した。恐らく、そのまま大学で研究を続けていけば、曲りなりにも、なんとか研究者として一家をなしていたかも知れない。私もその方向に進むものとはばかり思っていた。それが、私の半生を学校経営管理者として運命づけたのは、関東学院女子短大教授就職の翌年（昭和四三年）、あの関東学院大学の学園紛争に端を発した女子短大大学長公選制により選任を受けたことである。それは赴任後、まだ関東学院のことが十分わからない四四歳の秋であった。

それから三期六年、そして、四年間休んでさらに四期一〇年、併

せて十六年間学長職にあり、休んだ四年間も家政科長をしていて、家政科系実験実習室を含む一号館建設に協力した。したがって、関東学院在職二十二年のうち、二十一年間は学校行政にたずさわったことになる。その間、教学面では女子教育の振興や、栄養士養成・保育者養成などの職業教育に力点をおいたが、もちろん研究は余りできなかった。それでも私は満足している。それは関東学院における女子教育や女子短大を確立したこと、女子短大の校舎を建て女子学園としてのキャンパスを形成できたこと、教養教育中心の女子短大に職業教育を導入したこと、女子短大のレベルアップしたこと、などもあるが、それよりも大きかったのは、本学院にきてキリスト教教育という人間性を培う教育に当面したことであった。長年、社会的視野の狭い、化学研究室の中にあつたものにとつて、これは誠に驚きであった。このような建学精神をもつ学校に務められ、自身を含めた人間教育の場にめぐり合った喜びである。このことは、専門の学問研究を深める以上のことであると思われるので、私は大いに満足しているのである。

私が選任在職中のこの二十二年間に、教職員の皆さんに大変よくして頂いた。特に、学長在任中における協力には感謝している。すなわち、教授会も、労働組合も、職員の方々も、大変好意的であつたと理解している。もつとも中には、女子短大の方向を決する学科設置などに反対し、最後まで自己本意にふるまつた二、三の教員もあつた。それらの人達は、関東学院に勤めながら関東学院の教育理念を理解しようとし、この女子短大に勤める喜びを知らうとしないやからであつたと私は思っている。しかし、大部分の方々には、女子短大の正に「学校作り」に協力して頂いた。ことに、上市二郎前事務長と、小玉敏

子先生には、私の在職中はもとより、私以前の相川学長時代、以後の下田学長時代を通じ、終始女子短大のために献身的に奉仕をされた。この紙面を借りて敬意と感謝をささげておきたい。これらの教職員の一一致協力とその奉仕は、正にキリスト教にもとづく建学精神が、知らず知らずのうち、みんなの心の中にあるのではないかと思う。このことは本学の特色となつてゐることではなからうか。

女子短大が、今日のように隆盛になつたのは、前述のような教職員の協力のほか、客観情勢のいくつかの条件がととのつたことによると思われる。それを列記すると次のようである。

(一)、関東学院の中で、女子短大は唯一の女子教育機関であつたが、学院成長期にはかえり見られなかつた。しかし、関東学院がある程度大きくなると、総合学園形成には女子短大を育成する必要が生じてきた。

(二)、大学紛争の長期化により、その解決には大学構内にある女子短大を撤去したほうがよいと理事会及び大学当局の判断があつた。また、大学のマスタープラン実行のためにも女子短大の移転が必要であつた。これに乗つて女子短大は独自のキャンパスを開拓し、計画的に移転建築を行つて、イメージアップを計つた。

(三)、長らく関東学院大学の影にかくれていた女子短大が、「女子短大の主体制確立」と銘打ち、一挙に表面にでた。これが関東学院の歴史に根ざした基盤に乗り、浮上して全国にその名が知られるようになった。

(四)、この二〇年間、わが国の高等教育機関への進学率が上昇して、女子短大教育拡充の傾向にあつた。これに沿つて、本学でも職業教育を導入して総合短大をはかつたことが、大都市、近郊

短大としてこれが適合した。

そのほかにも、本学が栄えた原因があるかも知れない。それにしても今日の本学の存在は、第二次大戦直後の混乱期に、それまで男子のみの関東学院に、女専を設立された相川高秋先生の卓見を忘れてはならない。その種が今日のように成長したのである。また、創設以来、校舎設備とも不十分な中で教育された先生方、また、当時学ばれた卒業生諸姉に、現在の隆盛が続くものであることはもちろんである。関東学院女子教育四十余年の後半を預かつた者として、相川先生および諸先輩に感謝申し上げたい。

以上述べたように、私が関東学院女子短大の専任教員として勤めた二十二年は、本当に仕合わせであり、恵まれていた。そこで、私は専任教員定年を迎えるに当り二、三の大学・短大から招聘を受けたいが断り、特約教授として残ることとした。関東学院の規程では、大学・女子短大教授は、六五歳定年後五年間特約教授として新たに採用され、勤めることができることになっている。もつとも、これは学院側に決定権があるのであるが、下田学長および山口家政科長の要請があり、残ることとなつた。そして、同じキリスト教の教えを建学の精神とする関東学院の姉妹校である彰栄保育専門学校の学園長、校長を兼務することにした。彰栄学園は一八九六年（明治二九年）アメリカバプテストの宣教師ヘンリー・タッピングにより建てられた学校であり、かつて私も理事を務めた。その学校の今後の運営には多くの問題があるが、神から与えられた使命と考え、関東学院と同様、努力して行くつもりである。同窓会の諸姉に、これまでのご厚情を感謝申し上げるとともに、今後のご協力をお願いする次第である。

女専のページ

台湾留學部、太魯閣

小山 郁子

台湾留學に至った経緯は、いろいろあるのだが、字数に制限があるので、ここでは省きたい。ともかく「定年後に目指したボランティア活動に中国語が必要だから」が主な理由である。

私が入学した国立台湾師範大学は、台北市の中心やや南に位置し、和平東路を南北に挟んで建っている。中国語だけを学ぶ留学生は、およそ九〇〇人、その専従教師二〇〇人、一クラス最高五人まで。月謝は、毎日二時間の週十時間コースで約一万三千円である。

最初に入ったクラスは、タイ国の十八才と二十才の華僑姉妹、そして十九才と二十五才の日本青年と私の五人。教師は北京出身の男性で、私より四才年下。ロビーやエレベーターで行き交う学生達を見ても、みんなキャビキャビ・ギャルまたは男子で、私と同じくらいの五十代後半に近い学生は、遂に見当らなかつた。



学生には申し訳ないが、我々日本人には易し過ぎる。当然「借」の反対は「貸」と書いたが、なんとこれが

授業は最初から中国語だけで行。チンプンカンブンで、ナーンにも解らない。解らないうまゝポロツとしていくうちに、三ヶ月が過ぎた。然しこれが、いつとはなしに、だんだんと解ってくるから不思議である。学校の規則で、試験は毎月二回、宿題もかなり多くて授業は結構厳しい。試験と言えば、未だに忘れられない思い出がある。次の言葉の反対を書けの中に「借」があった。漢字圏以外の留学生には申し訳ないが、我々日本人には易し過ぎる。当然「借」の反対は「貸」と書いたが、なんとこれが

のこと。それでも納得が行かない私は、別の学校の先生や友人に訊いてみた。勿論中国人である。答はやはり「還」であった。少々アタマにきた私は「他人から借りたら返すのは当然でしょう」と声を荒げたところ、逆に「日本人は返すのが当然なのか」と問いつ返され、こちらはウツと絶句したまゝ声も出なかつた。十人寄れば気は十色なんてものじゃなかつた。貸借関係に就いての考え方が、同じ東洋人でも、どうも違うのである。貴方に貸すは「借給你」、貴方に借りるは「向你借」が一般的な言い方である。貸すのも借りるのも「借」を用いる。だとしたら貸と借の関係が、何となく曖昧になってくるのも頷ける。もつとも、最近の日本人の麻痺した金銭感覚が、国の内外で、人々の不信や怒りを誘発している現状では、他民族のことをとやかく言えた義理ではないのだが。

日本では、ポルノがかったものをピンク色になにと言うが、中国では「黄色」を使う。ピンク映画は「黄色電影」で、艶笑小話は「黄色笑話」である。と同時に、黄色は皇帝の色でもある。菜の花の黄色か、卵黄の黄色か定かではないが、とにかく、黄色は高貴な色なのだ。映画ラスト・エンペラーの中で、

少年皇帝溥儀が、弟溥傑の袖口にちらっとのぞいた黄色を見付け、黄色は皇帝の色だからお前は身につけてはいけない、早く脱げ、と逃げる弟を追いかけ回す場面があった。然し何だつて又、黄色が、皇帝の色とエロティックな表現の両方に使われるのか、一考を要するところだが、如何にも中国のおおらかさを感じさせて、私はこういふところが好きである。昔の皇帝は、多くの妃をかゝえた艶福家揃いだつたので、その辺から「黄色笑話」などと言うようになったのだろうか。それとも、中国人は黄色に色気を感じるものであろうか。折りがあつたら、中国大陸、台湾、両方の友人に訊いてみたいものである。

中国人は愛想に乏しいと言われている。昔はいざ知らず、社会主義になつてからの評判は芳しくない。ならば自由の台湾ではどうであらうか。正直に言つてあまり愛想がいいとは言えない。にこやかさに欠ける上に、頭を下げる習慣がないせいもあつて、接客態度はいさゝかぶつきら棒に見える。中華航空のステューワーデスも又しかり。ただし、一流ホテルや日本資本の新しいデパートなどは、訓練のたまものか、いくらか増しなようだ。これがいっつらん親しくなると、こちらが恐縮する

程の手厚いもてなしぶり、その落差たるや著しい。私のようなオパンの為に、略先生は誕生パーティーを開き、閩教師からは、私が夢中になっている台湾トップ歌手のショーへの招待を受け、帰国直前には、ご主人、お子さん、お姉さん、家族ぐるみの食事の饗應にあずかつた。ついこの間まで、未知の間柄だった陳さんは、私の保証人になつて、あれこれ気を遣ひ、正月休みには、四泊の旅程で、ご主人ともども、ご主人の実家に連れて行つてくれた。ここでも、一家総出の熱烈歓迎に感激しながらも、すっかり好意に甘えてしまつた。日本鼻根の下宿先の大家さんご夫妻、親子ほど年齢離れた若い友人達、みんなみんな、想い起こすと泣けてくるほど、親身に世話をしてくれた。彼等に対する感謝の念は筆舌に尽しがたい。彼等は決して金持でも何でもない。ごく普通の市民である。

日本が第二次大戦に敗ける迄のざつと六十年間、台湾は日本の統治下にあつた。そんな関係で、日本人に対しての悪感情がどの程度なのか、実は台湾へ留学する前、このことが一番気がかりであつた。然し前述したように子期せぬ嬉しい歓迎を受け、厚い人情に包まれた、幸せいっばいの一年であつた。帰国後

はや十月、今もこの幸せの余韻にどっぷり浸っている。あまり幸せ過ぎて、このしつぱ返しがいつ来るのか、怖いほどである。

(女専英一)

「短歌」

竹内 道子

癒えし友の電話の声弾み

朗読奉仕に出掛くと言ふ

盲目の人は分厚き賛美歌の

点字読みつつ凜々と歌ふ

信仰をもたざる者も折ると言ふ

大江健三郎の真摯なまなざし

しあわせと人前で語る麻痺の娘の

若き生命の我に眩しも

麻痺もてる娘を旅に出せし元日は

上水べりを夫と歩くも

三十年麻痺の娘を介護せる

われの体もコルセット着く

沖縄戦資料館の入口に

錆びたる銃剣山と積まれあり

真赤なるハイビスカスの並木道

娘の運転をわれは楽しむ

島根路を旅する姉妹三人の

胸には揃ひの青き瑪瑙揺るる

大櫻眺めながらに歩みおり

人影のなくまっすぐの道

武蔵野に移住して早くも二十五年たちました。負ふた子に教へられる様に、娘と共に短歌会に属していますが、又道遠いです。近況報告に、短い詩型でお伝え出来れば幸いです。

(女専家政科一回卒)

土 鈴

安藤 洋子(河合)

① 雛の日に母より祝ひの言葉きく

五十路半ばのわれは幸せ

(昭和六十年三月三日 この頃から母

は体が悪く十二月三日昇天致しました)

その頃の短歌ですので少し古いのですが、連作の中から少し選びました。

② 消え残る雪押し分けて立つ露のとりに

間近き春の香のする

③ 夜更けてひとり聞く虫のコーラスに

波立つ心はいつか静まり

④ 病床に淋しくなるといふ母の

声を背に出る外は雪模様

⑤ 蛙鳴き鳶が輪を描くふるさとの

短歌詠む喜びを母は語りし

⑥ 痴れゆくを他人に知らるをいやがりて

面会謝絶を母は頼みし

⑦ 助け呼ぶ声に目覚むればあゝ悲し

ベッドの上に母すでに亡く

⑧ 母住みし部屋に一夜をまどろめば

明方近く夢に出し母

⑨ まどろめば亡父亡母亡祖父母に弟妹も

出て来たのし夢の世界よ

⑩ 舞ふ雪を亡母と並びて見し窓に

今朝は少女がわれに手を振る

⑪ 土鈴振り「洋子ちゃん起きて」の弱き声

耳に残りてはや一周忌

何か悲しい短歌ばかりですのでお目ざわりの事と思います。

母の日に子供が私にカーネーションを送ってくれました時に詠みましたのを二首

(昭和六十二年五月)

⑫ 母の日にカーネーションの鉢植を

さしたす吾子の背丈伸びたる

⑬ 鉢植のカーネーションを

「お母さんありがとう」と

さし出す息子はプログラマー

暫くぶりでペンを取りましたので思う様に

ペンが動きませず乱筆お許し下さいませ。

原稿の正しい書き方も忘れてしまいました。

本当に期日を大分過ぎてしまい申し訳ございません。宜しくお願い申し上げます。

(女専家政科三回卒)

(4ページから続き)

お知らせしました。当日は、十四名の先生、七十余名の卒業生が出席して下さり、ユーモアあふれるエピソード、想い出話が沢山出て、大変なごやかな楽しい会になりました。出席して下さった皆様には心からお礼申し上げます。又欠席で記念品代をお送り下さった方々も多数あり、心から感謝申し上げます。又ご案内の届かなかった方々には失礼を重々お詫び申し上げます。先生には、同窓生一同の感謝の気持として記念品代と、中々上等と自画自讃のネクタイピンとを贈らせて戴きました。先生は四月から特約教授として週二日短大で教鞭をとられる傍、東京の彰栄学園保育専門学校、校長、校長として、その手腕をふるわれていらっしゃいます。先生のご健康と新しいお仕事のご成功をお祈りしたいと思います。

覚え書(十七)

—女専・短大小史—

上市 二郎

歲月の流れは早いもので学院の定年から既に四年以上過ぎてしまった。横浜を離れ約一年八ヵ月、時折女子短期大学を訪れると色々懐かしさが込み上げてくる。学校も益々発展の路を進み、本年の受験生も四千八百六十三名とのことだ。昨秋には名誉教授の鳥越ノリ先生が叙勲された。昭和四十三年九月から学長の重責を背負ってこられた林淳三先生が本年三月定年を迎えられた。小さな二学科の短大(当時受験生も五百五十名位)を五学科三専攻の学校にまで育て上げて下さった先生のご功績は実に大きいものがある。心から感謝申し上げ先生の今後のご多幸をお祈りする次第である。これからの短大も時の流れに乗って益々ご発展下さることを祈念する一人である。

さて、前号は昭和三十年十月下旬頃の暖房設備と諸々の様子を記したところまでであつ

た。今回もう少し建物配置等について記録しておきたい。学生生徒が毎日登下校に使用した通用門が海に面してあり、門を入ると左側に一、二、三号館と木造二階建ての校舎が立ち並び、右側には学院の収益事業部のメッキ工場があつて、工学部学生の実習工場ともなつていた。正面突き当りに平屋の大きい建物があった。ここは旧海軍航空技術廠工員養成所時代の食堂だった所とか、その頃は礼拝堂(大講堂)と多目的に使用されていた燦葉ホール、YMCA部屋、それにおそまつな短大家政科の研究室、特別教室二つがあり、礼拝堂横(西側)には学生食堂と炊事場も付いているという雑多な部屋の在る建物であつた。當時としては已むを得なかつたことだろうと思つた。燦葉ホール北側の屋根棟に大きな三ツ葉の校章が取り付けてあつて、その上に鐘が吊るしてあつた。通用門脇に住んでおられた樋口老人が毎朝この鐘の綱を引いて鳴らす音により礼拝時間が知らされ、礼拝堂へ三三五五集まつて行ったものである。やがて、ここが昭和四十一年頃に大学七号館(経済学館)として生まれ変わったのである。

例年実施されるスキー実習は、暮から正月にかけてこの年も捜真女学校生徒も参加して

行われていた。いよいよ昭和三十一年一月に入つたのであるが、記録を追ってみると、学年末の行事の予定表が発表されていて、それによると定期試験は二月二十八日(火)から三月三日(土)まで、卒業礼拝は三月十四日(水)午前十時から、卒業式は三月十六日(金)英文科第二部は十七日(土)となつていた。

一月二十七日(金)は学院の創立三十七回の記念日に当り、教職員の記念祈禱会が朝の九時三十分からキリスト教研究所礼拝堂に於て行われ、十時三十分から記念式が前述の大講堂で挙行された。式終了後、教職員の懇親会(昼食会)が燦葉ホールで開かれ、年一度の学院全体の教職員の集まりでもあり和やかなひとときが持てた。六浦校地と三春台校地とが交互に当番となつて実施されていた。この折、学部では大学主催の記念講演会が計画されていて、この年は一月二十八日(日)横須賀商工会議所で、また二月四日(土)は横浜中商企業会館にて行つてゐた。夫々専門の先生方が一般の人々に分かりやすく、理解できるような講演だったことを思い出す。

第三十七回創立記念日とは、学院が横浜の地に初めて私立中学関東学院として設立発足、

大正八年(一九一九)一月二十七日横浜開港記念館に於いて学院設立の披露会を催したこの日をもって創立記念日と定めたものであった。平成元年一月二十七日は第七十回を迎えたことになる。現在の創立記念日は十月六日であるが、学院創立百周年記念式以後改定されたので、これは学院の前身横浜バプテスト神学校が横浜の山手に創設された明治十七年(一八八四)十月六日をもって創立の日と定めたものである。本年の秋には第百五回を迎えることになる。

二月十一日(土)祭日にルツ寮(女子寮)の学生による送別観劇会が行われた。会場は東京の歌舞伎座、謝恩の意を表わしたいとの考えから専任の先生方を招待してくれたので学生との良き交りの場ともなった。夕方五時頃総てが終了し劇場前で自由解散となった学生は銀座方面へ流れて行った。地方出身の彼女達にとって学生時代の最後の良い思い出のひとつを作ったことであろう。

横浜市教育委員会の社会教育課から依頼されて、金沢地区の成人教育調理講師として本学の井口安喜子先生に是非とのことだった。先生は施設設備等の点から初めは固辞されていたが結局引き受けて下さったのを思い出し

た。日程は三月八日(木)から四月二十六日まで毎週木曜日、本学調理実習教室を使用して開講したのであった、大変好評で終了後、再度の機会にも是非とのことだった。

この年の卒業礼拝並びに卒業式は、英文・家政両科の学生合わせて百名以内のためキリスト教研究所礼拝堂を借用して行うことになった。英文科が約六十四、五名、家政科が二十七、八名の時代である。

四月を迎え昭和三十一年度が始まるのである。この年度の人事で女子専門学校設立当初からおられ、英語担当の時田信夫先生が今月から学部から先生として移られ、そして学部からは化学担当の大河原泰之先生が迎えられることになった。新たには英語担当の小玉晃一先生が就任された。

宗教委員会の計画により大学、短大の教職員研修会が伊豆の天城山荘で開かれることになった。期間は四月一日(日)から三日(火)までだった。主題は「寛容なる愛」となっていた。設備準備のため学部の方々と共に前日から泊まり込んで、色々手分けしてその任に当たったものである。学部の教職員とも交りの場が多く、より一層親密になったことは確かである。しかし女子学生と共に利用する天城

山荘は夏か秋だったので、四月の中伊豆は山頂に残雪もあって夜に入ると冷え込みが一段と厳しくなったことなど思い出す。

新しい年度の学年主任が発表になった。それは、英文科一学年安藤寿々代先生、二学年は小滝奎子先生、家政科一学年鳥越ノリ先生、二学年は井口安喜子先生、夜の英文科第二部一学年柴三九男先生、二学年は小玉晃一先生であった。

四月下旬頃までには例年新入生の歓迎会が行われているが、この年は懇親会を兼ねてのプログラムが組まれ、鎌倉市の由比ヶ浜にある日本学生会館が会場となった。昼食を共にしながら学友会の紹介やら、文連・体連の各クラブ紹介などがあって、一、二年生の交歓の場となり教員との交りの場ともなった。英文科第二部の自治会による新入生歓迎会は四月三十日(月)に行っているが小人数の関係もあって、こちらも中々楽しい良い会であったことを記憶している。

明年(三十二年)四月から開講すべく専攻科について、カリキュラムや担当教員の打ち合わせが再三行われ、五月十一日(金)に相川高秋先生と共に申請書類の草案をもって文部省に出向いた。その結果、書類詮衡を通過

する見込みが得られそうなので、其の後、本腰を入れて申請書類の作成に当った。勿論この折は英文、家政兩科を申請したのであった。そして十一月十三日（火）に専攻科設置申請書類を文部省に提出した。ところが後日家政科は担当教員の審査が厳しく、特に栄養学担当教員の問題で已むを得ず申請を取り下げることになってしまった。従って翌年一月の中旬の発表になったのは、専攻科（英語専攻）で認可されたのであった。

この年の大学祭は学部自治会と短大友会とが話し合いをもって参加することに決定した。日程は六月一日（金）から三日（日）まで開催することになった。従って五月三十一日（木）は準備、六月四日（月）は後片付け等で臨時休講となった。一日には開会式、引き続き体育祭が行われていた。六月二日（土）は県立音楽堂でのシェイクスピア英語劇の上演であった。学部及び短大の学生、ベストメンバーを揃え、演出は光畑愛太先生が担当し、英語の指導を小滝奎子先生と柳生直行先生が当たり、俳優座から衣裳を借用し、その上俳優座の中堅の川本氏が熱心に演技の指導に当たってくれた。今回は「ウインザーの陽気な女房たち」と「ロミオとジュリエット」であった。

そしてアメリカ文化センターと朝日新聞社が後援して下さったとか、プログラムやポスターも今迄のようなガリ版刷りと異なり、大河原泰之先生のレイアウトで立派な印刷で完成した。当日は廊下まで溢れる満員の観客でした。公演が無事に終了して音楽堂の横に大きな箱型のトラックが着いたのは、もう夜の十時近くだったのを思い出す。衣裳や大道具・小道具等の運び出しが始まる頃も出演者、裏方の学生達、観客の人々の興奮が未だ余韻を残しているかの如く立ち去らずさわめていた。色々と批評し語り合っていたことだろう。

（前事務長）



合同同窓会報告

◇合同同窓会は今年も月一回の幹事会をもち活発に意見の交換をし合って、より充実した活動をして学校法人関東学院にとつても、有益な働きをしたと努力しています。昨年十二月二日には、ヒンチマン院長、高野理事長を始め各学校長の理事諸氏をお招きして、交流の場をもちました。今後年に何回か、この会を続けてお互いの理解を深め、学院の発展のために協力していく予定です。

◇坂田記念館の起工式が、三月二十九日、関係者出席の元に、三春台の宣教師館跡地で行われました。崖地であるため、当初の計画から多少縮小の変更がありました。いよいよ着工の運びとなり、完成が待たれます。

◇去る六月二十六日、横浜国際ホテルにて、平成元年度の合同同窓会総会が開かれました。香葉会からも幹事十名が出席して、六十三年度の事業報告、決算報告、今年度の事業計画予算審議をしました。各部会、各々に活発な活動をしておりますが、今年も交流を深めて関東学院同窓会として力をつけていきたいと思っております。

（古城記）

どんなときに お赤飯をつくりますか？

大越 公平

毎年二月になると卒業した学部の研究室から「追出しコンパに参加しませんか」という往復葉書が舞い込みます。それを手にし、ひとときだけ今から二十年前に遡り、あの雑然とした実験室や研究室に思いを浮かべます。

書籍や調査資料が部屋の半分を占め、専門の講義や演習も、それにフィールド・ワークの資料整理もこの実験室で行われました。それ以外の時間は、学生の議論(?)や雑談が絶えない控入室でした。

「実験室だから何か実験をしなければ」と冗談半分、真面目な気持ちで半分、誰となく言い出す妙な部屋でした。理系の実験室とはかなり掛け離れた、ユニークな空間だったのです。文化人類学はフィールド・ワークが仮説の実験・検証の場であり、調査資料の保存・管理がこの部屋の目的でしたが、同時に学生にとってはとても居心地のよい空間でもあったのです。多分これは今でも変わりのないことだろうと思います。「小さな研究室もまた少し新たな卒業生が誕生するのか。総勢何人になるのだろうか。たしか私が四回生だから」と記憶を手繰り寄せながら、自分にとっては昨日のことのように思えることも、かなりの年数が経過していることに改めて驚いています。

葉書の連絡欄には、なぜか近況を書いてみたくなり、一度も会ったことのない後輩に宛て、ときには短大の研究室で資料を整理しながら考えたことなども交えて書いています。わずかな年月を過ごし

ただけなのに、そのときが一年一年遠くなればなるほど、「母校」という言葉の魅力に酔える貴重なひとときとなります。学生時代の楽しい思い出を現在の生活のなかでの一つのアクセントとし、ほろ苦い思い出も懐かしい思い出に変えてしまおう「心のゆとり」を持ちたいものだと思っています。

卒業生の皆さん、その後お元気で活躍のことと思います。静かな雰囲気味わいながらあれこれ考えてみたい季節になりました。日々の暮らしの中で、「短大の卒業生」であることをどのようなお気持ちで受け止めていますか。短大での青春時代の数々を思い出し、その懐かしさを弾みにして、ふたたび皆さんの「母校」である短大を訪ねてみませんか。

私の方は相変わらず皆さんの後輩を前にして文化人類学の講義を楽しみながら続けています。本人は楽しいのですが、聞いている方は楽しいかどうか、あるいは…? 皆さんが想像できるような以前と変わらぬ講義風景が展開しているといったらいでしょうか。後輩の姿と皆さんの姿が、次第次第に重なっていきます。

そうそう、こんな質問を受けたことがあります。「不祝儀にも祝儀のときと同じように、お赤飯を出す地方がありますが、どうしてこうした習慣があるのでしょうか。少し変わっているように思うのですが」と、とても難しい、しかし、とても興味深い質問でした。それも一人ではありません。憶えていますか。「お赤飯はお祝いごとに出すおめでたいもの、なのにどうして悲しみの儀式のときに出すのだろうか」という思いが日常生活を通して生じてくるのは不思議ではありません。そのときは、民俗学の一般的な「ハレとケの観念」で説明しました。「ハレとは、特別の日のことで、今ではお祝

いごとのほうが強調されて使われていますが、当然不祝儀も含まれているのです。特別な日ということで理解すればよいのです」と、とりあえずは、このような説明が可能です。

以前、短大で講義をされたこともある和田正洲先生は、「神奈川県では祝儀・不祝儀に赤飯を届ける。ことに特徴的なことは不祝儀にも届ける。(中略)不祝儀には濃い親戚、婿方の不祝儀には里方、仲人の死には仲人子などから赤飯を容器に入れて贈る」(和田正洲一九八四「祝儀、不祝儀時の赤飯・容器」『神奈川県民俗分布地図』十二頁神奈川県立博物館)と解説されています。分布地図は県の多くの地区でこうした習俗があることを示しています。また、その際に用いる容器として「ダイカイ」という特別なものがあり、同じ赤飯を入れるにしても、祝儀の際に重箱で持つていくこととの区別があることを先生は指摘されています。

では、何故このような習俗があるのでしょうか。一見、何気ないことのようにですが、その民俗学的意味づけは日本のかなり古くからの生活様式に関連する事柄を含んでいるようです。和田先生は、大分以前から、不祝儀のお赤飯や棗の問題について論じられ、赤飯が赤米に由来するという説を紹介されています(和田正洲 一九五九「食物と忌」『短大論叢』第一四集 関東学院短期大学)。

柳田国男が白い米を赤色の小豆で染めるのは喪われた赤米と同質の価値をもとめようとする信仰の一過程と仮説して以来、今日では日本民俗学の主要なテーマとして注目を浴びています。これがさらに展開し、「なぜ赤米が儀礼食として用いられなければならないのか」とか、「白い米と赤米とはどのような関係にあったのか」とか、「小豆そのものが儀礼食において価値があったのか、それと

も結果として赤い色が求められたのか」という疑問が当然のことながら生じ、論議を呼んでいます。日本の農耕文化の特色を考える上で重要であるとともに、日本の基層文化の構成にかかわる問題であると理解されています(坪井洋文 一九八六「稲作文化の多元性―赤米の民俗と儀礼―」『風土と文化』日本民俗文化大系 一小学館)。つまり、講義で受けた質問はとても大きな研究テーマにながっているわけです。もちろん、まだ解決はしていません。

それで、私もこうした習俗の実状を確かめてみようと思いをみつけてはフィールド・ワークを行っています。「どんなときにお赤飯をつくりますか」とたずねて歩きます。昨年のちょうど今ごろは、矢嶋先生(文化史・思想史)に協力してもらい、彼自慢のオートバイに乗り、紅葉のはじまった山北町へ出掛けたこともありました。まだ大分かかりそうですが、いずれまあとめてみようと思っています。気長に待っていただければ幸いです。

できれば、神奈川県だけでなく、郷里に帰られた方や結婚され移られた方はその地域の習俗についても一緒に考えてみませんか。暮らしの民俗学について、実際の生活をもとに関心をもつてみませんか。このテーマに限らず衣食住の文化に関する研究は、「女性の目」がとくに生かせる分野ではないでしょうか。

「今日はお赤飯ですね。どんなお祝いですか」、わたしたち一人一人の日常生活では、こうありたいものですね。不祝儀の赤飯が忘れられていくことは、変わりにくい伝統的文化が時代とともに少しずつ様変わりをしていくことの一例といえるでしょうか。

さらに、この赤飯も現代的な食べ物に変わりつつあるようです。お祝いごとの多い、楽しい暮らしをいつまでも。お元気で。

お元氣ですか？

なつかしい先生のページです。

門根 静子

初めに学校の御発展を心からお祝い申し上げます。

さて私事近況となりますと二年前に市の敬老無料バスを頂戴いたしましたからバス利用が多くなり、とみに脚力の衰えはひどいものです。

香葉会からお便りをいただいてすぐ欧州視察団同窓会本年度幹事から、横浜港大棧橋停泊のクイーンエリザベスII世号のランチタイムでの案内が届きました。年金者にはチト贅沢な会費ですが冥途の土産にと予約申込をしておいたのです。海の女王QUEEN II、世界をめぐる豪華船でのランチと船内見学、二月先の五月二十日に備えて淑女のマナーを心がければと、ぼけ始めた頭を叩いています。十四年前、県の私学欧州視察団に参加させて戴き二十九名のお仲間と二十七日間の旅を満喫したあの若さが嘘のようでございます。でも冬にはあの妙高へ家族とスキーに参りますが、一昨年は若い男性にぶつけられた右膝と足首捻

挫、同行の家族は同情どころか「スピードのないスキーはグレンデの粗大ごみ、もうやめたら……」と、でも昨年滑らないことを条件に同行しましたが、陽光を浴びてきらきら輝く山々に心踊り、現地で貸しスキーを借り初心者コースを慎重に滑り、感と呼び起ししたら之がいけるんですねえ、リフト待ちの二・三十分も苦にならず五回六回と回を重ね中級コースに挑んで快適、すっかり気をよくして「また来年もお願いね」と「えっまだあと十年もあるんじゃないの青春終っちゃうよ」と言った孫の彼は高校一年の十六才、若い家族に見放された今、昔仲間とでもと必みじみ考えています。昔歩いた高山はとて無理と意思しますので思い出に止めて、低山歩きを頑張つてやろうかなと小さな夢を育て始めています。紅葉狩には手近な高尾山へ五年続けて行っていますが山は同じでも趣きは毎年違います。出好きな私は「遊び人」の異名をつけられていますが腰を曲げ乍らも出かけられる幸せを感謝しております。ここ二月の間に親しい友人三人が緊急入院をしました、他人事のように思っていた老いの身のもろさを身近に感じる今日此の頃でもございます。三春台の頃の皆様もそろそろ体が重く思われるお年、

背すじをシャンとのばして軽やかに歩き下さい。御健康を祈り上げます。

短大の益々の御発展を願いつゝ――。

平成元年三月中旬

(元短大体育教授)

関東学院短大とわたし

大塚 野百合

同窓会の雑誌に、わたしに書かせていただくことを、大変うれしく思います。終戦後のあの廃墟のような三春台の校舎にわたしが専任として勤めたとき、初めて礼拝の司会がまわつて来ました。「ガールズ・ピーアンピシャス」と言う題で話しました。早稲田を卒業してすぐ、東京裁判の検事局で翻訳の仕事をしていましたが、裁判が終わったとき、当時の院長の坂田祐先生が関東学院に招いてくださいました。夫人の俊子先生が、かつて恵泉の女学校でわたしの受け持ちで、特別に目をかけて戴いてたご縁によるものでした。教師として初めて礼拝で話したとき、わたし自身もおおきな「アンピション」を感じていました。当時の学生は、とても大人で、個性があり頼もしい人達でした。(数年前、神戸女学院をおとずれたとき、そう当時の学生であった

駒野さんが立派な経済学者になっておられるのを見て、感激しました。）テキスト・ブックもろくなものが無く、上市さんがガリ判で作ってくれたものを使っていました。それでも学生は、いきいきして、若さを発散させていました。

大学の先生たちとの合同のクリスマス会するとき、傑作な大学の先生が、「催眠術をかけるから、誰かでてきてください。その、机をそこに置いて、椅子はあそこ」と指示して準備をさせて、「そーら、この人は、わたしの催眠に罹って、言うとうりに動いたでしょう」と言われたので、一同大笑いをしたことをいまでもはつきり覚えています。

六浦に短大の立派な校舎ができたとき、恵泉の教師たちと見学して、とても羨ましく思ったものでした。幸い恵泉も多摩に数年前に短大のすてきなキャンパスができ、去年の四月には大学が設立され、わたしもそのスタッフの一人として教えています。

この二年間朝日カルチャー・センターで英文聖書を教えたので、もっぱら英語の聖書を勉強しました。そして英文科では、すべての学生がバイブルを学ぶべきだと思っています。いまヨブ記を取り上げています。

去年の夏から「文学に現れた老い」について本を書いていきます。この春休みに手直しをするつもりです。創元社からそのうちにでます。同じ出版社からだした『文学に現れた人間像』（改定版をそのうちにだす予定）と『生きがいの人生論』をどうぞ読んでください。

（現恵泉女学園大学教授）

「香葉」第十八号に寄せて

大河原 泰之

私が短大と同じ六浦のキャンパスに勤務しながら、素晴らしい、眼を見張るような数々の短大の校舎では、一度も講義をしたことがない。と申すと、昔を知る方々の中には、奇異に思われる方もおられると思います。確かに昭和三十八年以降二十六年の間、疎遠になっているのですから。

また私のことが、記憶のどこかに残っておられる卒業生の方々も、今では若い方でも四十四・五才、古い方（失礼）では六十才になつておられると思います。したがって私は六十年に定年、その後来年三月まで特約教授を拜命している最高年令の在職者ということになります。現在の所属は工業化学科で、当

科の設立と同時に、一般教育より移籍いたしました。

在籍四十年という永い年月の流れを遡れば、女専最後の年からの三春台、二十九年から大文学と同居の木造校舎、そして短大館（現一〇・一一号館）で英文科（一・二部）と家政科の主として化学関係の授業を担当して参りました。現在の短大は詳しくは解りませんが、学科の増設、それに伴う施設や機器の充実、人事の拡充など、一流校としての風貌を備えつつあるように見受けられ、往時を知る者として感慨一入あらたなものを覚えます。

このような次第で私も本年一〇月には七〇才、来年三月末を以って完全退職、形式的にはお別れをいたします。三十五年以降、約三十年のお話は卒業生の皆様には全くのヒトゴトであります。現在存じ上げている現職の方は林・下田・小玉・鳥越の諸先生、図書館の松本さん、それと五十年から六十年にかけて厚生会の委員としてご協力頂いた先生や事務の方がた、そのように覚えております。

強い印象が残っている幾つかの出来事を挙げてみますと、つぎのようになります。染物の講習会、化粧品品の製造、教職課程の講習、シェイクスピアの上演（三春台）北海道・九

州の旅行（夏休み）、家庭機工学、天城のトリート（六浦）といったところでしようか。

以上のような次第で、今後は病勝な荆妻共々、与えられた日々を平穩の裡に過ごして参りたいと思います。関東学院の永い歴史に汚点こそ記さなかつたと自負は致しておりますが輝かしい一行すら残し得なかつた点は心残りに思います。終りに短大の事務長であつた上市二郎先生に心からの謝意を表し、諸兄姉のご健康とご発展を心より念じ申し上げます。

（関東学院大学教授）

小 玉 晃 一

私にまで機会をお与へ下さり恐縮しております。十七・八年前から痛風になり、一昨年から眼を悪くしておりますが、つとめも殆ど休まず、どうやら生きております。

短大には昭和三十一年から三十四年までお世話になり、同年、青山学院大学へ移りました。当時はアメリカ文学を勉強していました。その後比較文学へ関心が向き、ホイットマンや有島武郎を中心に研究を進めています。筑摩書房版『有島武郎全集』（全十六巻）の編集、それに社会的には文部省の審議会の委員、日本比較文学会の代表理事など、かなり

忙しくしています。来々年夏には国際比較文学会の大会が、アツアでははじめて日本で開かれ、しかも私の大学に決まつておりますので、金集めその他、なかなか大変です。

短大には専任をやめたあとと断続的に教えていますが、昔からみると実にかわりました。実によくなりました。三十年代のオンボロ校舎がウソみたいで、八景から左側の入江を見ながら歩いていくと、こつ然と白亜の殿堂が屹立し、まことにすばらしい眺めです。ただ学生気質は、昔も今も変わらず、極めて明るく、しかも人なつこく、ミッシヨン・スクール育ちの私はとても気に入っています。英文科へ出講のときは、人数が足りるとよく断られました。ひどいときは一年おきでしたが、国文科ができてからは「外国文学」を継続してもたせて頂いて、最初から計算すると、非常勤講師では最も古い一人でしょう。

とにかく二十五才で大学教師として人生のスタートをきらして頂いた学院ですので、なつかしく思い出が一杯です。オンボロ木造校舎で、勢いよく歩いていて床がぬげ足をけがしたことを、階段がちびていて、踏みはずし滑り落ち、下にあつた防火用の水の一ぱい入ったドラムかんにぶつかり、身体中ずぶぬれに

なつたこと、鎌倉の学生会館の屋上で、亡くなつた柳生直行先生の指導でカレッジソングやクレメンタインの歌を歌つたこと、その柳生さんや、いろいろ悪いことを教えて下さつた敬愛する兵藤さんと三人で読書会をしたこと、天城山荘でのスタンツ、など思い出はつきません。

短大とまだ縁が切れないのは、そんな青春の思い出の場であるからかもしれません。ついでに私の葬式はあのすばらしい礼拝堂で……と願っております。妻は一人おりますが、昔と同じ女性であります。

（青山学院大学教授）

「古き思い出尽きず」

伊 澤 三 郎

請われるままに、神奈川新聞平成元年四月九日取材の「古き思い出尽きず」の十日の記事を頼りに、自分の思い出を、そして近況を戯文してみる。

七十年前の大正八年四月九日に中学関東学院第一回生入学式が兵隊山で行われた。初音町の普門院とその墓地の間、巾2メートルそこそこの坂道を二曲して門柱に、墨根鮮やか

この道を通ったのである。

門の正面に木造二階建ての校舎が新入生を迎えた。幸いに晴天に恵まれて、青天井の下での入学式であった。新入生徒百四十六名の記念すべき中学生生活が始まった。

私達一回生は、卯月9日は、忘れることのない記念日である。大正十二年の関東大震災に遭遇し、その翌年三月に、五年間の学業を終えたのである。

通学時の入口、出口であった普門院の前通りは、直角に曲がる路上市電の最徐行の箇処とび乗りとび降りの離れ業通学も終了した。当時、電車の運転台・車掌台は、ドアの外で、鉄棒をつかんでの早業乗降である。読者の皆さんに、この早業通学が解るかな!!

中学関東学院創立七十年の祝賀式典が催されたこの年の四月九日を一回生春季特別クラス会が選んでの開催だ。

卒業後六十五年目に当るこのクラス会に参ずる者僅かに五人、加えて来賓に、現高校々長水野先生、当日の主目的、亡き級友の追悼祈禱会を兼ねての集いのため、学院卒業生の白根牧師のお二人、ご招待者に級友御遺族の高藤善次郎氏一人の参加で行った。

生存級友は、最高八十五才、最低八十二才

一人で現在手元での文通可能者は十四名で、身体的事情で、また地理的事情等で不参加、残念がってのお言葉がよせられている現状です。小生は八十五才、幸い神の恵み豊かに健康で、今尚全国的活動を多角的に奉仕して居ます。学院母校に昭和六年四月以降に職を与えられ、定年退職後、学院女子短大を昭和五十二年三月まで講師で完全退職今日に至る。

現在活動範囲は、全国私学共済年金者連盟常置役員、その神奈川県支部長、関東地区幹事等、加えて、日本バドミントン協会名管理事として各大会に、横浜市協会会長、かんらん会幹事等々で奉仕活躍、全国を駆けづり廻っている。学院での生涯生活の神の与え賜う深い恵みを感謝する。

(元短大体育講師)

五郎のこと

瓜 巢 憲 三

ちようど、わたしが短大に勤めた年から、飼いはじめた柴犬五郎(雄)は、この六月で満十六才になる。人間の年齢では、九十才を越えているらしい。したがって、五郎の老化は一日一日と進み、最近では、犬小屋で寝そべっていることが多い。

このことが、早速コミヨニケートされたのであろうか。このところわが家の庭に、近くの飼い猫たちが交互に現われるようになった。もちろんそれは、池の鯉や餌台に集まって来る雀、山鳩をねらってやって来るのである。五郎が健在なところは、猫が一步でも庭に足を踏み入れようものなら、猛然とおそいかかって、追ばらった。わがテリトリーを守りぬく彼の執念は、たいしたものであった。

五郎は雷が嫌いである。雷の鳴る夜は悲しそうな声を低くあげた。そこで雷の鳴る夜は、五郎を室内に入れていたが、やがて、食後茶の間に入れて、彼を夫婦の団らんに加えることにした。それは、五郎のとっても気に入ったプログラムだったようである。

わたしが在宅している限り、夕食は午後五時半。老人ホームの食事時間と同じである。したがって、六時になると、彼は濡れ縁の側で待っている。食事がなかなか終りそうでないと思うと、犬小屋にもどって、またやって来る。決してほえない、ほえても自分の要求が通らないとなると、彼は犬小屋に行つたままで出で来ない。

食事がすむと、茶の間のすみずみまで毛布を敷き、五郎の足をきれいにふいてから、茶

の間に入れる。そしてサブレット、みかんをむいて与える。それが終ると、五郎は自分の席に座わる。席はわたしの正面にあって、五郎専用の座ぶとんが置かれている。

席につくと、五郎は、まずわたしの顔をじつと見つめ、やがて妻のほうに目を移す。そして目を閉じたまま、わたしたちの話に耳を傾ける。もし口論にでもなろうものなら、彼は立ち上がってわたしに近づき、二・三回わたしの胸のあたりに顔をすり寄せる。「もうよせや」「けんかするなよ」とでもいつているようである。

五郎にとって、妻は彼のアイデンティティである。その妻を、かばう彼の気持ちがいじらしい。

(現社会福祉法人旭児童ホーム 理事長)

"I'm very proud of you"

望月 享子

東海大学へ移って十年余になります。数年前に永年勤続の表彰をしていただきました。十年勤続から表彰して下さるのです。今でこそ日大、早大に次ぐマンモス大学ですが、学生数が減り、教職員も落ち着かなかった頃を銘記されたことなのでしょう。もう関東学

院とはすつかり縁が切れてしまったかといえますと、どうしてどうして——。大学北門前のファミリーマートの女主人は四三年国文科卒の斎藤(旧姓塩田)俊子さんです。女子学生をアルバイトに使っていただいています。同じく国文科卒の善波佳子さんは東海大に勤務されており、いつもお世話になっています。

それでも十年余は短い時間ではありません。幼稚園から小学生だった息子が大学を出て社会人二年生になっているのですから。短大祭で皆さんとフォークソングを歌ったことなど懐かしく憶えているようです。その息子が昨年入社式の日、勤務地岡山という辞令を買って来たのです。青天のへきれきでしたね。四月十七日の午後、新幹線で発ちました。日曜日で学生時代の友人、サークルの後輩(部長をしていましたから)、それに彼女も駅へ見送りに行くというのです。とても母親の出る幕ではありません。家の近くでタクシーを拾って「元気でね」というのが勢一杯でした。ガツクリして玄関に戻りますと、普段履きの靴を忘れているではありませんか。何か書いて一緒に送ろうと急に元気が出まして——その前の年の秋に息子も見に行ったという映画『アントタッチャブル』で、ネス警部を奥さんが励

ますために書いたメモ *"I'm very proud of you"* を思い出しました。スーパードライでは「頑張ってるね」と出ましたが、一寸意味が違いますね。「私はあなたをとても誇りに思っているわ」——そう伝えてやりたかったのです。荷物が届いた頃、「ダサーイ」という電話がありました。

"I'm very proud of you"、といえば、はじめに書きました斎藤さん、善波さんばかりでなく、短大の卒業生皆さんに贈りたい言葉です。立派なお母様として、社会人として、それぞれ活躍されているご様子を、暑中見舞や年賀状で、毎年十通以上嬉しく拝見致しております。どうか健康を大切に、今後ともおしあわせにね。(蛇足ながら息子はその後二ヶ月足らずで東京勤務になりました。大変ご心配をかけました。)

(元短大心理学講師)



追伸・瓜巢先生の五郎君は死去しました。

グリーンフェスティバルによせて、 三春台ハンドベルクワイヤ演奏会

毎年、グリーンフェスティバルに香葉会として、何人かの講演者を迎え、女性の色々な生き方など、考えながら楽しんできました。今回は、同学院三春台のハンドベル・クワイヤの演奏会を開催いたしました。太田先生率いる二十数名の中・高校生。中間テストが終わり、短い練習時間の中、生徒さん達の熱心な練習に太田先生の方が生徒達にあおられ奮起されたようです。

十一月三日。三春台での橄欖祭開会式に参列のあと、短大の方へ駆けつけてくれた生徒さんたち。短い時間でのリハーサル。太田先生の最後までのでんしい練習。研ぎ澄まされた一人一人のベルの音。一曲を作り上げるための積み重ねの練習。そして本番前の最後のチェック。

午後一時、礼拝の後、ハンドベルメンバリーの入場。JSバッハの作曲の小フーガ。生徒たちの精一杯の音。静まりかえった場内では時間に遅れはしたものの、後から後から席が埋まって行きます。一曲目の演奏が終わわり、太田先生からの曲の紹介とハンドベルについての説明がありました。現在では、プロテスタント教育の学校では、大分広がっているハンドベルです。学院ではその草分けといえるのではないのでしょうか。毎年の海外演奏会、世界大会への出場と、学生自身の本分である勉学とは別に、メンバリー達は得難い体験をしているようです。この後、G・S・ヘンデル作曲のバッサカリア。W・A・モーツァルト作曲のエレ



ジー。K・バックワルター作曲のベルのための独り言。一曲一曲を礼拝堂の隅々まで響かして、一部を終了しました。十分の休憩と十分程度の香葉会の総会。この間にメンバリーには、腕を休め、緊張をはぐし、二部への英気を養ってもらいました。生徒達がベルを振りつづけられる時間は、せいぜい三十分位だそうです。大人になり体力をつけられるようになれば時間的にも永く振りつづけられるようです。

二部。オーストラリア民謡のウォルツィングマチルダの軽快な演奏でスタートしました。生徒たちも一部の時よりも緊張がはぐれたのでしようかとてもリズムカルでした。二曲目に、アイルランド民謡のロンドンテリーの歌。三曲目にM・P・ムソルグスキーのキエフの大門。四曲目に初めて日本の曲、滝廉太郎の荒城の月。和楽器・洋楽器で聞く荒城の月とは別に、ベルだけの音は、暗い夜空に輝く月の色が目に浮かぶようでした。そして、アンコール曲で、坪能克裕作曲の祭り日。祭りの軽快さ。楽しさ、そして激しさ。ベルのテクニックを駆使し、全てをだしつくした感でした。

短い時間の中で精一杯の演奏を十分に堪能しました。グリーンフェスティバルに参加できなかった諸氏。又、ハンドベルを迎える機会があると思います。その折には是非おさそいあわせの上おでかけ下さい。

今年のグリーンフェスティバルの参加もお待ちしております。

国文七回卒 葛城容子記

セーヌの流れは灰色 でも憧れの街、花の都パリ

吉屋保子

パリの公園で生まれてはじめてマロニエの白い花の並木をみた。大きな木の枝にブドゥーの房のようなこまかい花がぶらさがっていて緑の葉と空の青さにはえて、それはそれはきれいだ。これがマロニエの花咲く頃、マロニエの木蔭と詩情ゆたかに唄われた花かと感激しながらじっと耳を澄ませていると、花の甘い香りと一緒に恋人のささやきが聞こえてくるような気がするのも環境のせいであろうか。舞台はすでに用意されていて後は役者の登場を待つばかりであったが残念ながら私達は開幕をみる事なく移動しなければならなかった。これがやっと休みをみつけて同窓の小林寿恵子さんと一緒にヨーロッパ七ヶ国（イギリス、イタリア、フランス、オーストリア、西ドイツ、スイス、オランダ）を約三週間（3/25〜4/17）で旅行した時のパリの第一印象である。ヨーロッパ大陸には歴史と伝統があり、古代の遺跡や建築物、はては自然の魅力あふれる雄大なアルプスがある。特にロマンチック街道（ドイツ中央部のビュルツブルグから南へローテンブルグ、アウグスブルグの古都を通りオーストリアの国境に近いフュツセンに至る三七〇キロの街道）などは中世の姿そのままに一幅の絵になるような町々である。キリスト教をバックボーンとしてきた国民性からか壮大な大伽藍や美しいモザイク模様の大寺院が多くみられる。又おとぎの国から抜けだしてきたような白く美しいノイシュバンシュタイン城、レマン湖に浮かぶ

白鳥、ロンドンのバッキンガム宮殿、ウエストミンスター寺院、ピクベン、シエクスピアの生家、映画ローマの休日で有名になったトレビの泉、ナポリ、ポンペイの遺跡オランダの風車とチューリップ等枚挙にいとまがない、あれもこれも書きたい事ばかりだが限られた紙面で全部を書く事はとうてい無理なので今回はフランスだけに焦点をしばって書いてみたい。私達はジュネーブからフランスが誇る超高速列車TGVで夕暮れせまるリヨン駅に着いた。うすぐらいホームに降りたつと大きな犬をつれた人が歩いている。どうやらこの国では犬をバスケットに入らずに乗車してもよいらしい。おまけにホームの真中に犬の糞がゴロゴロ落ちていて誰かがそれをべちゃりとして踏んで大ききわがしをしていた。速さは別としてやっぱり日本の新幹線はきれいき、明るさスマートさに於いて世界一と皆んなでお国自慢をしてしまったが、国際儀礼上色々な批評は差しひかえる事にする。用意されたバスでいよいよパリ観光である。パリの空の下セーヌは流れる昔からシャンソンで唄われてきたセーヌ河どんな河かしら？フランスにはロワール、ローヌ、ガロニス、ガロンヌ、マルヌ、オワーズの大きな河が流れているが、パリと言えはその中心を流れているセーヌ河であり、パリの歴史の流れをみつめてきた河でもある。ゆったりと流れるセーヌは水も豊富で花の都パリに風情を添えてはいるが、なんとその水が灰色なのには驚かされた、もつときれいな水の流れを想像していたので。でも水が灰色だからといって河そのものがきたないというのではない。河はきれいでゴミも浮いていないのに、なぜか水だけが灰色なのである。でも人々の憧れのパリはこのセーヌと共にあり歴史と芸術、グルメとファッションの本場として限らない夢と詩情につつまれた花の都パリに変わりはないの



であつて、映画や本の知識から自分勝手に想像していたあやまりを訂正し本当に実際にきてみてよかつたと思つている。パリを訪れる人は必ずと言つていいと思つが次にあげる名所旧跡を全部とまではゆかなくても二つや三つは訪れると思つるルーブル美術館、ノートルダム寺院、シャンゼリゼ通り、凱施門、エッフェル塔、および郊外のベルサイユ宮殿、ロワールの古城めぐり等である。今回はベルサイユ宮殿はバリの南西二十三キロにあり、ルイ十四世の絶頂期にその富と権力と二十年の歳月をかけて完成させたといわれるイタリヤ式バロック建築で一步中に入ると、その絢爛豪華さには目をみはるものがある。大理石と金箔をふんだんに使つての建築はマンサール、天井画や彫刻などはルブラン、庭園はル・ノートルと言つた具合に当代一流の芸術家達の粋をきわめたもので、特に広大な回廊と二つの広間を殆んど鏡だけで飾るなどという事は未曾有の豪華さであつて、当時非常に高価であつた鏡や大理石の装飾は人々を驚倒させたに違いない。ここは現在ECサミットがフランスで行われる時に使われるとかいふ事であつた。ベルサイユ宮殿には見学出来る部屋が三十六、階段、回廊が五あり、それぞれ名前がついている。1、王妃の階段 2、王の衛兵の間 3、大会食控えの間 4、牛眠の間 5、王の寝殿 6、閣議の間 7、王の小寝殿 8、時計の間 9、犬の間 10、王の階段 11、食事の間 12、王の執務の間 13、王の奥書斎 14、黄金の皿の間 15、王の図書の間 16、磁器の間 17、撞球の間 18、遊戯の間 19、礼拝の間 20、ヘラクレスの間

21、豊穣の間 22、ウィーナの間 23、ダイアナの間 24、マルスの間 25、マキユリイの間 26、アポロンの間 27、戦争の間 28、鏡の回廊 29、平和の間 30、王妃の寝殿 31、子午線の間 32、図書の間 33、王妃の奥の間 34、貴族の間 35、王妃殿の控えの間 36、王妃付衛兵の間 37、戴冠の間 38、一七九二年の間 39、王子の階段 40、戦史の回廊 41、一八三〇年の間、等であり実に多くの部屋がその名にふさわしく一流の芸術家達によつてデザインされた天井の絵、壁画、肖像画、彫刻によつてその雰囲気をも出し出し、何世紀もたつた現在でも見る人の心を魅了し中世にタイムスリップしてしまふから不思議である。今回は特に印象に残つた王室オペラ劇場と礼拝堂について書いてみたい。この劇場はルイ十五世が一七六八年に設計者アンジュ・ジャック・ガブリエルに依頼して建造にかかり、一七七〇年五月十六日、後のルイ十六世となる王太子と大公妃マリーアントワネット（フランス革命で処刑されたオーストリアの皇女）の結婚の時に落成されたものである。天井にはデュラモア作「ミューズに冠を配るアポロン」が描かれている。又、ミューズと美の三女神の姿の間に見えるオリンポスの神々の横たわつてゐる姿もある。愛の神キューピットの彫像、内部にある暖炉の彫像は、アポロン、ウィーナ、平和、若さと健康、叙情詩、田園詩、叙事詩、劇詩を表すバージュの作品によつて飾られている。このオペラ劇場が世界最高といわれるのも、うなづける気がする。巧妙な設計、つりあいの調和美、華麗な装飾美、色合い、音響効果の優秀性等、数ある劇場の中の傑作の一つにちがいない。次に王室礼拝堂である。まず、主祭壇が目に入る。上壇には大変素晴らしいパイプオルガンが設置され、主祭壇にはエホバの三角形が輝い

ている。「栄光」崇拜する天使たち、十字架から降され、処女マリアの膝に横たわっているキリストの浮彫りがある。これらは金箔仕上げのブロンズ製でコルネイユ・ヴァン・クレーヴの作と言われて、王太子の洗礼や結婚式等フランス王室の宗教的儀式に使われていたそうである。礼拝堂は一六九九年に着手され、一七一〇年に完成された。聖三位一体を表わした天井画「栄光の中にまします父なる神」

「キリスト昇天」「使徒たちの上に降臨する聖霊」等、大理石の白色と黄金色のシンフォニーの中にその均斉のとれた典雅な趣、装飾の華麗さはフランス王朝の絶頂期に贅を尽くして作られた最高傑作と言えよう。ルイ一四世はこれらの宮殿建築のために使った資材、大理石、鏡、ピロード、刺繍などの贅沢品が全て外国から調達されている事に気づき、外国から最高の学者、技術者、芸術家を集め自国でそれを生産し、対外的輸出を計ったという事である。世界のどこにいても、フランス製の最高級品が目につくのも、フランス経済の今日の繁栄はその起源をヴェルサイユ建設にまでさかのぼると言っても過言ではないような気がする。今年にはフランス革命二百年記念で、七月にはパリ祭が盛大に行われるそうである、パリの街は浮きただっている。パリはフランスの代名詞、フランスの魅力がすべてここに凝縮している。歴史・芸術・ファッション・グルメ等数えきれないほどである。サントノレ通りには、ランパン・エルメス・サンローラン・グッチ・セリーヌ・ギ、ラッシュユ等の高級店がたち並び、女性にとっては、つい財布のひもがゆるみがち、ともあれ一度、ご自分の足でお試しあれ。世界の人々の憧れを一身に集めて、中世のパリがそこにあるから——ロマンの風薫る憧れの街、花の都パリに栄光あれ。一九八九年五月記（短大英文科二回卒）

新名簿 発刊!!

チャペルで祈りを捧げた学生時代、懐かしいお友達の仕事が掲載されています。これを機会に離ればなれになってい
るお友達の友情の輪が広がりますように、こんな願いをこ
めて新しい名簿ができました。
お手元に一冊ご購入下さい。

送料込 一冊 二、五〇〇円

同封の振込用紙にてお申し込み下さい。

申込先 香葉会事務局



パイプオルガン 完成!

念願のパイプオルガンがついに完成し、七月三日、短大チャペルに於いて引き渡し式が行われました。製作者であり、またパイプオルガン製作所の社長である、ゲオルグ・ヤン氏の手による演奏は、まさに中世の世界に私達をタイムトリップさせてくれました。

このパイプオルガンは西ドイツ・ゲオルグ・ヤン、オルガン製作所による日本向け第一号のもので、三十三ストップ、三段鍵盤、ペダルを有するオルガンです。

チャペル正面にそびえるその姿は美しく、シャープで、それでいてどこか愛らしさをも



鍵引き渡し式：ヤン社長よりの挨拶。(通訳は望月氏)

感じさせるものです。

・五月初めに西ドイツ、ハンブルグ港を出港し、五月十三日に短大に到着。すぐにドイツのオルガン技師四名の手作りで、一本一本丹念に作られました。手の平に乗る程の小さなパイプから、長さ五メートル程にもなるパイプまで、約三千本ものパイプが組み合わさっています。鍵盤の真上には垂直に出ているトランベットのパイプがあり、非常に立体的です。鍵盤の横には左右に二〇個程ずつのボタンがあり、そのボタンにより、様々な音色が作り出されます。一つの鍵盤をたたき、ボタンを押ししていくと音の幅は四段階になり、奥の深い、美しい音色となるわけです。

十一月には卒業生の皆様にもこのすばらしい音色をお聞かせできる予定です。



〈新任教職員紹介〉



青柳 明 先生

○英文科講師
○カリフォルニア州立

大学大学院卒業

○時事英語、英語担当

牧野 ひろ子 先生

○国文科講師

○成城大学大学院卒業

○国文演習II担当



小西 晶子 さん

○学生課

○幼児教育科六十三年度

卒業

伊藤 智子 さん

○幼児教育科

○幼児教育科六十二年度

卒業

外崎 みゆき さん

○電子計算機室

○関東学院大学工学部よ

り異動



クラス会報告

〈家政科食物栄養〉



名取（原田）美知子
昨年夏に行われまし
た「栄養士養成20年記
念会」に出席しました。
その時に同級会を開く
ことが決まり、9月10
日（土）、中華街で楽
しいひとときをすごし
ました。卒業して10年
子連れのにぎやかな同
級会となりました。
みなさん、10年前と
全然かわっていません
でしたね。その後おかわりありませんか……！？
幹事の方・次回同級会楽しみにしています。
同級会の会費の一部は、香葉会に入金いた
しました。この誌上をもちまして報告させて
いただきます。

「栄養士」準備委員・事務局のみなさま、
昨年夏はお世話になりました。

（五十三年卒）

〈家政科三十八年回〉



斉藤（杉山）比子

昭和六十三年十月十
六日（日）二十五年振
り、卒業以来二度目の
同期会を開く事ができ
ました。どうしたこと
か、卒業して一、二年
目に一度だけ会を開く
ことができずしたが、
それ以来、各々がお目にかかりたいと思っ
てはいたようですが実現できませんでした。
それが香葉会の方から私共に同期の方の住
所が殆どわからないと云うお電話がきつかけ
で、なんとか同期会の準備をいたしました。
しかし今度は皆さんが集っていただけか
し、お顔がわかるかしらと云う不安と心配が
ありました。二十一名の出席者で、集まっ
た瞬間から学生時代にもどりの時間を忘れて
話しに花が咲き、又お目にかかる約束を致し
ました。今回同期会を開くにあたり、香葉会
の洲上さんに大変お世話になりました。又会
場として鈴木美恵子さんのお店を長時間お借
りできた事を感謝致して居ります。ありがと
うございました。

〈北鎌倉にて―一月二十九日―〉

中村（勇崎）郁乃



十五年ぶりに昔の級友、そして「山下先生」
に御会いできる。なんとなく胸が弾むような
心持ちで横須賀線に乗りました。「山下先生」
の眠っておられる「光照寺」。その日は、と
ても寒い日でしたけれど、用意されていたお
花が春めいていて、「山下先生」の微笑んで
おられたお顔しか浮かんできません。十五年
の歳月が流れたなんて、まるで嘘のようであ
るの自分そのままに、そして、「山下先生」
もそのままなんです。子育てに追われる忙し
い日々の中で、子供への迷い、悩み、いろい
ろな人との出会い、そしてそこに生じてくる

食い違い……。『山下先生』ならば、きっといろいろなことをたとえをあげて、アドバイス頂けたかと思うと残念でなりません。墓参をすませ、振り返ると、今度は本を片手に教室を出ていかれた時の「山下先生」の後姿が浮かんできます。風によつて、たつた一度だけ電話でお聞きした、あのやさしい温かいお声で「お元気でね……」とおっしゃって頂けたような、そして十五年ぶりにお会いした「岡松先生」のどこかお淋しそうに写った後姿が、オーバーラップして、今でも心に残ります。学生の頃の懐かしい鎌倉の地が「山下先生」と共に忘れられない場所となりました。先生の御冥福を心より御祈り致します。

(国文科七回卒)



〈英文科三十五年卒〉

志賀ミチ

何年ぶりでしょう。英文科三十五年卒業のクラス会が実現しました。

四月九日。桜の花片舞う品川のホテル・パシフィックで会いました。お忙しい中、小玉敏子先生もおいで下さり、久しぶりの事で、出席者も予定の人数を上まわり、幹事さん達に嬉しい悲鳴をあげさせました。遠方からおいでになった方もありました。集まれば皆さんすっかり学生時代の気分に戻り、(子供達ももうその年代の人も多いですので……)なつかしい話題に花が咲き、当時のボーイフレンドの名前などもとび出し、それは楽しい一時になりました。

次回には、今回おいでになれなかった方々も御一緒に夢のように立派になった母校で会えできればと思っております。

お詫び

前号十七号「追悼：山下登喜子先生をしのんで」において、先生の著書名において『猿★』とありましたが、正しくは『猿蓑』です。ここに謹んで訂正いたします。

編集後記

今回の十八号香葉はいかがでしたでしょうか。前回、掲載できなかった旅行記。皆さんもフランスに行ったような気分になられたのではないのでしょうか。海外旅行に出かける時には、その国の歴史を勉強して行った方が、旅行書を見るよりは別の意味で楽しむことができるのではないのでしょうか。これから旅行をする方のための少々御助言を……。

皆様からの近況「香葉室」には、たくさん近況をいただいたにもかかわらず、掲載ができませんでした。申し訳ありませんでした。香葉あてのハガキに近況を書いて送って下されば幸いです。編集部一同でお待ちしております。

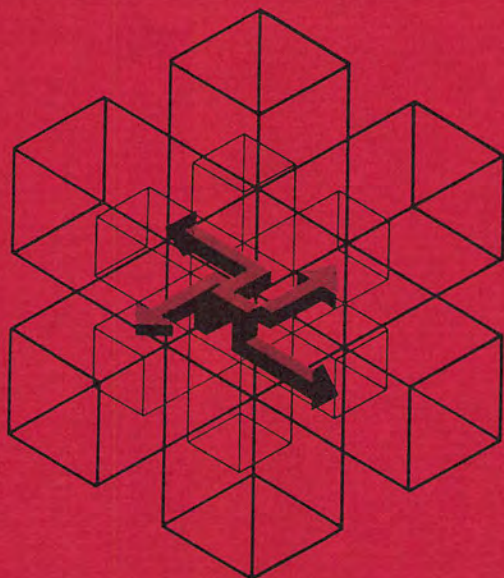
今回、記事を送ってくださった、学長先生を始め、諸先生方、会員の皆様、御協力ありがとうございました。今後とも原稿の方よろしくお願いいたします。

編集部一同

昭和 63 年 度 決 算				平成元年度予算
収 入 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
会 費	(@12,000×842) 10,104,000	10,104,000	0	(@10,000×870) 8,700,000
名 簿 代	0	0	0	(@2,000×870) 1,740,000
賛 助 金	500,000	705,100	△ 205,100	500,000
委託販売手数料	450,000	0	450,000	450,000
預 金 利 息	10,000	7,063	2,937	10,000
雑 収 入	5,000	98,080	△ 93,080	5,000
前 年 度 繰 越 金	1,589,665	1,589,665	0	1,625,891
合 計	12,658,665	12,503,908	154,757	13,030,891
支 出 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
通 信 費	2,000,000	1,785,855	214,145	2,200,000
印 刷 ・ 製 本 費	1,200,000	1,108,882	91,118	1,500,000
総 会 ・ 会 合 費	1,500,000	597,847	902,153	1,000,000
交 通 費	200,000	237,920	△ 37,920	500,000
用 品 費	70,000	114,435	△ 44,435	100,000
備 品 費	50,000	34,461	15,539	50,000
委 託 費	50,000	0	50,000	50,000
謝 礼 費	50,000	5,000	45,000	350,000
消 耗 品 費	50,000	9,786	40,214	40,000
人 件 費	1,500,000	1,518,000	△ 18,000	1,500,000
合同同窓会分担金	(@300×842) 252,600	252,600	0	(@300×870) 261,000
新入会員歓迎費	1,200,000	1,029,600	170,400	1,200,000
名簿発行準備金	1,900,000	1,900,000	0	2,450,000
特 別 会 計	500,000	500,000	0	500,000
雑 費	36,065	14,971	21,094	29,891
予 備 費	600,000	268,660	331,340	300,000
坂田記念会館寄付積立金	1,500,000	1,500,000	0	0
林 先 生 感 謝 会	0	0	0	1,000,000
(小 計)	12,658,665	10,878,017	1,760,648	13,030,891
次 年 度 繰 越 金	0	1,625,891	△ 1,625,891	0
合 計	12,658,665	12,503,908	154,757	13,030,891

六十三年度賛助金寄付者(敬称略)

柏木満理子	原田悦子	古内節治	布施里佳	市川由美子	松島紀恵	阿部由美	角津允子	古賀智恵子	高橋玲子	長坂かなえ	土山忠
持田きよみ	北尾文代	玉木宮子	清水悦子	加賀奈皇美	花房昭子	吉田弘子	奥真由美	池沢なおみ	肆矢三佐子	篠原繁治	原央子
今井美智恵	山地草子	中根悦子	川島久里	曾我かおる	土屋廣子	露木球恵	小林守信	高橋千栄子	石渡玲子	千田節男	井上君代
霜鳥三枝子	徐多恵子	和田照子	柳美子	佐々木晶美	山本祐子	熊谷君代	岩崎敦子	主馬野敦子	古郡綾子	岸本有加	山本長生
黒川まり子	佐生雅子	古川鈴子	浅葉勝美	石黒友理枝	佐藤久子	前納順子	小野和子	小川美津江	小川美津江	食物栄養Aクラス	
朝広美知子	市川郁代	光畑清	出榮美子	山口恵美子	岡岸幸恵	松倉恒夫	中村智子	田丸瑠美子	村岡愛子	藤平良子	田中晴子
錦織マサ子	住吉桂子	松井順子	馬場俊子	飯田三都子	寺内雅子	河原篤代	工藤一枝	江成千恵子	村岡博子	岡田貴子	神野裕子
飯塚まり子	小手幸子	重田和子	石黒和子	安田加代子	水田啓子	山内晴美	鈴木迪子	後藤美和子	三沢由美子	タハ茜	高野洋子
小林さとい	佐藤洋子	石橋正代	菅野弘恵	石渡千恵子	石井圭子	小川清子	和田澄恵	岩本ひろみ	三野宮恭子	竹内道子	益昌子
佐藤美砂子	宮島保子	倉本美子	鶴見智子	花村あつ子	中川あや	梅栄子	永井律子	関谷由利子	宮沢順子	山本和美	相原梅子
中嶋貴美子	根本京	足立求子	藪登喜子	福田しほり	飯島敏子	市原弘子	大井法子	小林千鶴子	飯嶋つる子	昭和45年卒卓球部	
岡部安耶子	平野綾子	長橋幸代	漆畑晴枝	中野ノブ子	鈴木伯江	山口周子	露木宏子	雨宮美千代	上川奈緒子	長谷川不二恵	
濱田二三栄	栗林芳恵	古賀恵子	笠木茂伸	小菅由紀子	安藤憲子	斎藤理恵子	仲尾曜	小野寺玉江	古城房子	吉屋保子	志賀ミチ
石塚サナ江	市川君江	加沼茂子	沖田恭子	窪田美恵子	山崎由紀子	杉本喜久子		坂井紀美江	安彦潤子	中西愛子	塚本令子
立石らあき	堺典子	松田良子	杉山愛子	松本智恵子	斎藤一正	孫明淑	青木由美子	八木智恵子	長谷川有紀	佐久間やよい	
鈴木美智代	土屋幸枝	大場幸子	庄野幸子	須賀佳代子	大澤尚美	山下佳子	土方直美	柳生二三	佐藤美代	辰沼滋子	金子眞理子
松井いづみ	梁島庸子	田辺和子	安田早苗	清田恵美子	金子洋子	高橋秀子	石渡朝子	小林寿恵子	田辺康子	松井洋子	内田節子
名城美砂子	金田春美	萩原久子	石塚優子	白石真砂子	峰尾育子	勝見修子	杉本幸子	鈴木トク子	濱田徳子	兩宮慶子	布施みえ
西尾由美子	須田広子	伊藤陽子	平井道子	森野恵理子	小島美淡	小田牧子	原嶋曜子	鈴木志津子	沖田夢子	田中久恵	洲上龍美
小林三恵子	佐藤薔薇	高橋洋子	細野清美	高村マリ子	吉田年江	竹村久子	石井明美	松本久子	山崎慶子	塩田令子	相吉典子
吉澤喜代子	高橋静子	越智協子	和田信子	浜村寿美子	リーディ實子	山口登紀子		井上多恵子	石田禎子	鈴木恵美子	
渡辺太佳子	立間浩代	菊地和子	高畑早苗	岩木由紀子	永末智子	井田玲子	豊田邦子				
細田喜久子	高田泉子	佐藤美紀	松永政江	梅山フク江	木村はな子	大島好恵	作山智子				
斉藤恵美子	高山政子	福井英子	福崎浩子	松浦きぬ江	中嶋洋子	田牧洋子	桜田幸子				
				岩野由美子	上野珠恵	斉田夷子	曾我侑子				



後輩へ就職求人を！

本学卒業生の就職については、卒業生の実績が実を結び、毎年卒業予定者の2～3倍に達する求人があり、各科共百パーセントに近い成績をあげています。しかし、地方出身者に関しては、短大卒業生を受け入れる職場が少ないのです。そこで、高校卒業生に比較し、対人応待等に優れ、即、戦力化し易い短大卒業生、皆様の後輩採用を、皆様及び皆様のご主人に是非、ご検討いただきたいのです。

短大生ご採用のお話しがございましたら、下記就職課迄、ご連絡いただけますように、お願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834 Tel (045) 784-1491 内258・281

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第 18 号

平成元年9月25日 印刷・発行

関東学院同窓会・香葉会

代表者 古 城 房 子

横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236

関東学院女子短期大学内

電話(045)784-1491 (内線216)

關東學院同窓會・香葉會誌